

長岡活字文化の 舞台裏

「互尊文芸」編集人 丸山 恵さんに聞く

(聞き手・安藤哲也)

印刷会社の社長として、市民の自費出版を数多く手がけるとともに、市民文芸誌として三十年あまり続いた「互尊文芸」の編集にも携わってきた丸山恵さんに、その舞台裏を聞いた。

○「互尊文芸」の編集を長い間されていますが、そのきっかけは。

「互尊文芸」というのは同人誌とは違うんですね。昭和五十年頃ですが、長岡の互尊文庫で市民の「読書の会」があったのですが、読むだけじゃなくて、自分たちも小説を書いてみようということになったのが始まりのようです。最初の二号まではタイプ印刷で、三号から私の印刷所で本づくりを引き受けるようになり、編集にも加わるようになりました。

○他にはどんな人が編集を。

当時、互尊文庫の司書だった稲川明雄さんと教員の佐藤正さん、それから私。その後に発行所を喫茶いそしぎ内に移して、いそしぎの川上洗さんも加わったですね。本の奥付のところの編集代表は、その号ごとに佐藤さんだったり私だったり





互尊文芸 第3号

ですが、実質は稲川さんがいろんな段取りをしていたと言ったほうがいいかな。それに表紙の題字は、互尊文庫の館長だった内山喜助先生の字なんですけど、内山先生も影の応援団でした。

○「互尊文芸」の特色は。

市民が誰でも自由に投稿できる市民文芸誌というのがウリでしたね。特定の同人はいなかった。経費は印刷代と郵送代だけですが、一冊千円くらいで売って、本の売り上げだけでまかかっていました。いつも「破綻寸前」とか言ってたけど、当時は書くことへの関心も高く、掲載できないくらい原稿も集まったし、本の売り上げもそれなりにあって、少しは黒字でしたよ。

○最近「互尊文芸」を見かけないのですが、休刊ですか。

三年くらい前に出したきりかな

あ。原稿さえ集まれば、いつでも出すつもりはあるのですが、みんな歳とったし、状況は随分と変わりましたね。

○丸山さん自身も『輪廻の出發』などの小説を書かれていますよね。

そうですね、短編を十編くらい書いたかな。

○そんなにあれば丸山さんの小説集を刊行できますね。

いやー、いいよ。恥ずかしいし。(笑) いろいろ試してみたけど、文芸って、どういふものか、難しいね。集まってくる原稿のなかには、読者を全然意識していないものもあって、そういうのは活字にしても一人よがり。公にする以上は読者の心に伝わるものを意識しないと。と、私は思いますけど、自分のことになると、やっぱり、難しいね。

○文学は子供の頃から好きだったのですか。

私は越路の朝日の百姓の家に生まれましたが、中学生くらいの頃から本にアコガレのようなものがあった、床屋に行くために貰った金で本を買って親に怒られたりしましたよ。最初に買ったのは日本文学全集だった。

長岡活字文化の 舞台裏

○本業は印刷会社を経営されているわけですが、趣味と実益を兼ねた仕事ですね。

印刷屋を始めたのは昭和四一年で、確か三十、一か二歳だったですね。本と関われるということでは良かったですが、毎日、夜十一時、十二時まで、がむしゃらに働きづめだったから、本を読む暇なんて全くなくて、本は読むものじゃなくて、買うものになってしまった。

○家中、本だらけだとお聞きしましたが。

数えたことはないのですが正確には分かりませんが、五千冊くらいあるかもしれない。床が落ちないか心配で、以前は、本を入れておくアパートを借りたり、会社の屋上にプレハブを建てて本を入れておいたりました。

○いま、その本はどうなったのですか。

息子の家の一階のフロアー全部が書庫のようになっていきます。それでも足りなくて、分散せざるを得ない状況ですね。商売を始める前は、時間があれば本屋に行つて、いろいろ読みあさりましたが、今は読むというよりも、本を集めるという感じかな。家族に言わせると、一種の病気ですよ。



タイプ印刷時代(昭和43年頃)

自宅廊下に並べられた本

○今も、毎日のように本屋さんに
行ったりするのですか。

書店のほうが私の傾向をよく承
知しているので、行かなくても、「こ
の新刊、どうですか」って持ってきて
くれるんです。そうすると、つい
つい買ってしまうんだよね。いろ
いろな分野にわたるんですけど、全
集ものとか歴史の資料集とか、値段
の高いものが多いのですよ。(笑)

○話を聞きしていると、家族の皆
さんの生活にも多大な影響があ
りそうですね。

そうそう。妻も息子たちも私の
本を邪魔にしてね。そのうち、この
本がどうなるのか、心配だね。

○話を戻しますが、本好きが昂じて
印刷屋さんを経営されるように
なって、一番良かったことは。

地域の方々の出版のお手伝いを
させてもらいましたが、その過程で、
素晴らしい人たちと巡り会うこと
ができたのは幸運でしたね。一番
懐かしく思うのは、民話の研究をさ
れていた水沢謙一さんですね。ま
だ、印刷の仕事を始めて間もない頃
でしたけど、私にとつての最大の出
会いです。とても、かわいがってい
ただきました。

○苦労もおありかと思いますが。

これは、どこの印刷屋も同じで
しょうが、「校正は魔物」と言っ
て、どれほどしっかり校正したつもり
でも、間違うんですよ。お客さんか
ら「あなたたちプロでしょ」と言わ
れても、ねえ。いつだったかも、
「○○さんをお祝いする会」の標
題のところが「お別れする会」になっ
ていて、会の進行途中に気づいたん
です。身の縮む思いですね。

○なるほど、緊張の連続ですね。イ
ンタビュ어의最後になりますが、
今後への思いを聞かせてください。
まだまだ老けていられないので、
私にやれることは、やっていますよ。



タイプからコンピュータへ

■ インタビューを終えて

少しはにかみながら、ぼくとつと
した丸山さんの語り口のなかに、こ
れまで長岡の活字文化の土台を支え
てきた力強さを感じた。「互尊文芸」
の次の号を是非とも読みたいものだ。